

## 参考資料 2 災害時の大気中石綿濃度

阪神・淡路大震災の際に環境省は、兵庫県及び神戸市の協力を得て、大気環境モニタリングを実施した。

当時の現地一般環境（17 地点）における石綿濃度の変化と、解体工事現場の敷地境界付近における石綿濃度を表 R2.1 及び表 R2.2 に示す。

また、被災地以外の一般環境中の石綿濃度に関する資料は、表 R2.3 に示すとおりである。

表 R2.1 追跡継続調査結果(継続 17 地点)

(本/ )

調査年月日	最大値	最小値	中央値	幾何平均値
H7.2.6 2.12	4.9	0.2	1.0	1.0
3.9 3.16	6.0	0.3	1.0	1.2
4.24 4.28	2.1	0.2	1.0	0.9
5.29 6.2	1.4	0.5	0.8	0.8
6.26 6.30	1.7	0.3	0.7	0.8
7.24 7.28	1.2	0.3	0.7	0.7
8.28 9.1	0.8	0.3	0.5	0.5
9.25 9.29	0.8	0.3	0.6	0.6
10.23 10.27	0.7	0.2	0.5	0.4

表 R2.2 建築物解体現場周辺調査結果

(本/ )

調査年月日	検体数	最大値	最小値	中央値	幾何平均値
H7.3.9 3.16	20	7.7	0.8	2.6	3.0
4.24 4.28	16	9.5	0.9	5.4	3.8
5.29 6.7	18	19.9	0.9	4.5	4.5
6.26 7.18	20	9.5	0.3	2.3	2.0
7.25 8.8	22	9.9	0.2	0.9	1.3
8.22 9.21	10	4.5	0.2	0.5	0.7
9.29 10.23	16	8.6	0.1	0.4	0.7

表 R2.3 石綿の一般大気環境濃度レベル(環境省資料)

(単位 本/)

年度	項目	商工業地域	住宅地域	幹線道路周辺地域
昭和 60 年度	検体数	84	110	140
	検出範囲	0.3 ~ 6.1	0.26 ~ 6.2	ND ~ 10
	幾何平均	1.2	1.2	1.0
平成 3 年度	検体数	38	30	38
	検出範囲	0.2 ~ 1.9	0.09 ~ 2.9	0.2 ~ 2.3
	幾何平均	0.67	0.34	0.61
平成 5 年度	検体数	60	59	60
	検出範囲	ND ~ 1.3	ND ~ 1.2	ND ~ 3.7
	幾何平均	0.17	0.14	0.43
平成 7 年度	検体数	60	78	60
	検出範囲	0.04 ~ 1.28	ND ~ 1.76	ND ~ 1.96
	幾何平均	0.19	0.23	0.41

当時の石綿の一般環境濃度は、2月、3月時において、一部の地域で高い地点がみられたものの、4月以降においては改善の傾向に向かい、夏期には表 R2.3 と同程度の数値となっている(表 R2.1)。

また、解体現場周辺の環境調査結果(敷地境界濃度)は、3月~6月においては高い地点もみられたが、7月以降には、解体等において石綿の飛散防止対策が浸透したものと推察される(表 R2.2)。

出典

1.	建築物の解体等に係る石綿飛散防止対策マニュアル 社団法人 日本作業環境測定協会
----	--